学科等における教員養成に対する理念・目標・教育課程

学部・学科	外国語学部アジア学科
校種（免許教科）	中学校教諭一種免許（中国語）　高等学校教諭一種免許（中国語）

（1） 学科の理念

アジア学科は、「人間の尊厳のために」という教育モットーのもと、１．中国語またはインドネシア語で情報を収集し、自らの立場や意見を明確に述べることができる高度な外国語運用能力、２．東アジア専攻では、中国、台湾、韓国などの東アジア地域で共有されてきた文化、東アジア地域の歴史や社会などに関する専門知識、ならびに日本や欧米諸国と東アジア地域との関係性を視野に入れて複眼的に東アジア地域を理解する力、３．東南アジア専攻では、東西文明の十字路に位置するインドネシアおよびその周辺の東南アジア地域が育んできた多文化共生社会に関する専門知識、ならびに東西世界および周辺地域との関係性を視野に入れて複眼的に東南アジア地域を理解する力を持ち、グローバル社会の課題解決に寄与できる人材を育成する。

（2） 教員養成の目標・計画

グローバル化が急速に進む現代において、外国語によるコミュニケーション能力は、一部の職業や業種にとどまらず、生涯にわたる様々な場面で必要とされる。外国語（中国語）科では、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を明確にしたうえで、小学校の学びとの接続を意識しながら、各学校段階の学びを接続させるとともに，「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にすることが求められる。外国語（中国語）科の教員には、高度で実用的な中国語運用能力を持つと同時に、言語や文化の異なる人々を理解し、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて自ら判断できるよう、生涯にわたって学び続ける力を持つことが求められる。

アジア学科は、グローバリゼーションが一層進むなかで大きな課題となっている、「日本とアジア諸国・諸地域との交流促進」という社会的要請に応えるため、平成 12 年 4 月に発足した。本学科は中国語とインドネシア語を必修言語としており、これは日本のアジア外交が中国と東南アジアのバランスを軸に展開してきたことに鑑みてのことである。日本人がアジア地域の人々と接する機会が多くなっている現在、相互理解・相互交流を促進するために、アジアを多角的な視点から捉えることができ、深い理解をもつ人材が求められている。

今日、日本の高等学校及び中等教育学校の後期課程においては、中国語の履修者が多数にのぼっている。文部科学省が昭和 61 年度から隔年で実施している「高等学校等における国際交流等の状況について」によると、平成 30 年 5 月 1 日時点において英語以外の外国語の科目を開設している学校は、18 言語のうち中国語が最も多く 497 校（履修者数 19,637 人）となっている。この傾向の背景には、日本の国際化の進展と高校教育の多様化、および中国の経済・軍事・外交の台頭に伴う影響力の拡大などがあるのは言うまでもない。アジア学科は、中国語圏の人とコミュニケーションするのに十分な言語運用能力を磨き、視野の広い、かつ複眼的視点を持った人材養成を目指している。

上述した教員養成の目標を実現するために、アジア学科では、次のような計画で教育を行う。第一に、教養教育を通して、国際的な視野と幅広い思考力を身につける。第二に、アジア学科が提供する中国語学、中国文学、中国語コミュニケーション、異文化理解の各領域に関する専門教育により、中国語教員に必要な知識・技能を修得する。第三に、台湾の歴史や文化、現代事情についてのフィールドワークおよび台湾の大学生との協働により、実践的な中国語運用能力を涵養

するとともに、教員として生徒に異文化交流の魅力を伝え、生徒が学びに向かう力を育成できるようにする。第四に、少人数制の演習によって、問題の発見から資料の収集・分析を通して、結論を導くまでの一連の研究方法を学習し、論理的思考力を身につける。

（３） 授業科目・教育課程の編成実施（校種・免許教科別に記載）

（ア） 中学校教諭一種免許（中国語）

中国語科では、免許法施行規則に定める科目区分に基づき、「中国語学」、「中国文学」、「中国語コミュニケーション」、「異文化理解」の四つの領域について、それぞれ特色ある授業科目を設けている。

まず、中国語学では、必修科目として「中級中国語I語法」、「同II語法」、「同I読解」、「同II読解」、選択科目として「中級中国語III読解」、「同IV読解」、「中国語学研究」を配置し、中国語に対する構造的理解を深める。

中国文学では、必修科目として「中国文学研究」、選択科目として「中国文化研究」を配置し、中国文学に関する基礎知識を涵養する。

中国語コミュニケーションでは、必修科目として「中国語I発音・聴力」、「同II発音・聴力」、「中級中国語I会話」、「同II会話」、選択科目として「中級中国語III会話」、「同IV会話」、「中華圏の言語と文化I」、「同II」を配置し、中国語運用能力の向上を図る。

異文化理解では、必修科目として「アジアと日本」、選択科目として「中国語と日本」、「中国語時事A」、「同B」を配置し、中国の現状やアジアと日本の関係について理解を深める。

「中国語科指導法A」「同B」「同C」「同D」では、中国語教育に関する知識・技能を学ぶとともに、アクティブラーニングの視点から授業改善できる実践的な指導力を身につける。

（イ） 高等学校教諭一種免許（中国語）

中国語科では、免許法施行規則に定める科目区分に基づき、「中国語学」、「中国文学」、「中国語コミュニケーション」、「異文化理解」の四つの領域について、それぞれ特色ある授業科目を設けている。

まず、中国語学では、必修科目として「中級中国語I語法」、「同II語法」、「同I読解」、「同II読解」、選択科目として「中級中国語III読解」、「同IV読解」、「中国語学研究」を配置し、中国語に対する構造的理解を深める。

中国文学では、必修科目として「中国文学研究」、選択科目として「中国文化研究」を配置し、中国文学に関する基礎知識を涵養する。

中国語コミュニケーションでは、必修科目として「中国語I発音・聴力」、「同II発音・聴力」、「中級中国語I会話」、「同II会話」、選択科目として「中級中国語III会話」、「同IV会話」、「中華圏の言語と文化I」、「同II」を配置し、中国語運用能力の向上を図る。

異文化理解では、必修科目として「アジアと日本」、選択科目として「中国語と日本」、「中国語時事A」、「同B」を配置し、中国の現状やアジアと日本の関係について理解を深める。

「中国語科指導法A」「同B」「同C」「同D」では、中国語教育に関する知識・技能を学ぶとともに、アクティブラーニングの視点から授業改善できる実践的な指導力を身につける。高等学校では2科目4単位以上を中国語科指導法ABまたはCDの組み合わせで選択必修とする。

学科等における教員養成に対する理念・目標・教育課程（2022年度入学生まで）

学部・学科	外国語学部アジア学科
校種（免許教科）	中学校教諭一種免許（中国語）　高等学校教諭一種免許（中国語）

（１） 学科の理念

アジア学科は、「人間の尊厳のために」という教育モットーのもと、１．中国語またはインドネシア語で情報を収集し、自らの立場や意見を明確に述べることができる高度な外国語運用能力、２．東アジア専攻では、中国、台湾、韓国などの東アジア地域で共有されてきた文化、東アジア地域の歴史や社会などに関する専門知識、ならびに日本や欧米諸国と東アジア地域との関係性を視野に入れて複眼的に東アジア地域を理解する力、３．東南アジア専攻では、東西文明の十字路に位置するインドネシアおよびその周辺の東南アジア地域が育んできた多文化共生社会に関する専門知識、ならびに東西世界および周辺地域との関係性を視野に入れて複眼的に東南アジア地域を理解する力を持ち、グローバル社会の課題解決に寄与できる人材を育成する。

（２） 教員養成の目標・計画

グローバル化が急速に進む現代において、外国語によるコミュニケーション能力は、一部の職業や業種にとどまらず、生涯にわたる様々な場面で必要とされる。外国語（中国語）科では、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を明確にしたうえで、小学校の学びとの接続を意識しながら、各学校段階の学びを接続させるとともに，「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にすることが求められる。外国語（中国語）科の教員には、高度で実用的な中国語運用能力を持つと同時に、言語や文化の異なる人々を理解し、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて自ら判断できるよう、生涯にわたって学び続ける力を持つことが求められる。

アジア学科は、グローバリゼーションが一層進むなかで大きな課題となっている、「日本とアジア諸国・諸地域との交流促進」という社会的要請に応えるため、平成 12 年 4 月に発足した。本学科は中国語とインドネシア語を必修言語としており、これは日本のアジア外交が中国と東南アジアのバランスを軸に展開してきたことに鑑みてのことである。日本人がアジア地域の人々と接する機会が多くなっている現在、相互理解・相互交流を促進するために、アジアを多角的な視点から捉えることができ、深い理解をもつ人材が求められている。

今日、日本の高等学校及び中等教育学校の後期課程においては、中国語の履修者が多数にのぼっている。文部科学省が昭和 61 年度から隔年で実施している「高等学校等における国際交流等の状況について」によると、平成 30 年 5 月 1 日時点において英語以外の外国語の科目を開設している学校は、18 言語のうち中国語が最も多く 497 校（履修者数 19,637 人）となっている。この傾向の背景には、日本の国際化の進展と高校教育の多様化、および中国の経済・軍事・外交の台頭に伴う影響力の拡大などがあるのは言うまでもない。アジア学科は、中国語圏の人とコミュニケーションするのに十分な言語運用能力を磨き、視野の広い、かつ複眼的視点を持った人材養成を目指している。

上述した教員養成の目標を実現するために、アジア学科では、次のような計画で教育を行う。第一に、教養教育を通して、国際的な視野と幅広い思考力を身につける。第二に、アジア学科が提供する中国語学、中国文学、中国語コミュニケーション、異文化理解の各領域に関する専門教育により、中国語教員に必要な知識・技能を修得する。第三に、台湾の歴史や文化、現代事情についてのフィールドワークおよび台湾の大学生との協働により、実践的な中国語運用能力を涵養

するとともに、教員として生徒に異文化交流の魅力を伝え、生徒が学びに向かう力を育成できるようにする。第四に、少人数制の演習によって、問題の発見から資料の収集・分析を通して、結論を導くまでの一連の研究方法を学習し、論理的思考力を身につける。

（３） 授業科目・教育課程の編成実施（校種・免許教科別に記載）

（ア） 中学校教諭一種免許（中国語）

中国語科では、免許法施行規則に定める科目区分に基づき、「中国語学」、「中国文学」、「中国語コミュニケーション」、「異文化理解」の四つの領域について、それぞれ特色ある授業科目を設けている。

まず、中国語学では、必修科目として「中級中国語I語法」、「同II語法」、「同I読解」、「同II読解」、選択科目として「中級中国語III読解」、「同IV読解」を配置し、中国語に対する構造的理解を深める。

中国文学では、必修科目として「中国文学研究」、選択科目として「中国文化研究」を配置し、中国文学に関する基礎知識を涵養する。

中国語コミュニケーションでは、必修科目として「中国語I発音・聴力」、「同II発音・聴力」、「中級中国語I会話」、「同II会話」、選択科目として「中級中国語III会話」、「同IV会話」、「中国語作文A」、「同B」を配置し、中国語運用能力の向上を図る。

異文化理解では、必修科目として「中国圏の文化と社会」、選択科目として「アジアと日本」、「中国の現代事情」、「中国語時事A」、「同B」を配置し、中国の現状やアジアと日本の関係について理解を深める。

「中国語科指導法A」「同B」「同C」「同D」では、中国語教育に関する知識・技能を学ぶとともに、アクティブラーニングの視点から授業改善できる実践的な指導力を身につける。

（イ） 高等学校教諭一種免許（中国語）

中国語科では、免許法施行規則に定める科目区分に基づき、「中国語学」、「中国文学」、「中国語コミュニケーション」、「異文化理解」の四つの領域について、それぞれ特色ある授業科目を設けている。

まず、中国語学では、必修科目として「中級中国語I語法」、「同II語法」、「同I読解」、「同II読解」、選択科目として「中級中国語III読解」、「同IV読解」を配置し、中国語に対する構造的理解を深める。

中国文学では、必修科目として「中国文学研究」、選択科目として「中国文化研究」を配置し、中国文学に関する基礎知識を涵養する。

中国語コミュニケーションでは、必修科目として「中国語I発音・聴力」、「同II発音・聴力」、「中級中国語I会話」、「同II会話」、選択科目として「中級中国語III会話」、「同IV会話」、「中国語作文A」、「同B」を配置し、中国語運用能力の向上を図る。

異文化理解では、必修科目として「中国圏の文化と社会」、選択科目として「アジアと日本」、「中国の現代事情」、「中国語時事A」、「同B」を配置し、中国の現状やアジアと日本の関係について理解を深める。

「中国語科指導法A」「同B」「同C」「同D」では、中国語教育に関する知識・技能を学ぶとともに、アクティブラーニングの視点から授業改善できる実践的な指導力を身につける。高等学校では2科目4単位以上を中国語科指導法ABまたはCDの組み合わせで選択必修とする。